

考古出土物から見た「倭の五王」の活動領域と中枢部

大下隆司

はじめに

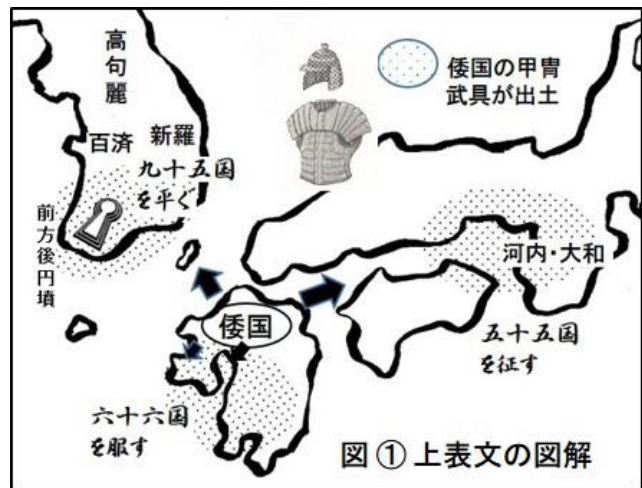
自昔祖禰、躬擐甲冑、跋涉山川、不遑寧処。東征毛人五十五国、西服衆夷六十六国、渡平海北九十五国。 (「宋書倭国伝」)

倭王武は上表文において、“先祖が甲冑をまとい自ら軍の先頭にたつて諸国を征服し、各地に領土を拡げた”ことを高らかにうたっています。倭王が拡大していった領土とはどこだったのでしょうか(図①)。

四～五世紀、東アジアは激動の時代に入っていました。各地で戦乱が起き、各国は軍備増強を計り甲冑など武具の急速な技術革新を行っています。

倭国においても、当時の古墳に埋納されている武具から、この波が押し寄せたことがわかります。そして古墳に残されている甲冑・武具を調べると、最新鋭兵器で武装した倭王の軍団がどこで戦ったか、またどの地域を制圧していったのか時間を追って追跡することができます。

各地に展開した倭国軍はどこに本拠地をおいていたのでしょうか。甲冑の



分布と九州に残された古代山城の分布からその中枢領域が見えてきます。本稿においてその様子をまとめてみました。ご批判いただければ幸いです。

最初に、倭国における甲冑の歴史からひも解いていきたいと思います。

I。弥生から古墳時代の甲冑—木製から鉄製へ

**兵用矛・楯・木弓、木弓短下長上、竹箭或鐵鏃、或骨鏃。…略…
宮室・樓觀・城柵、嚴設、常有人、持兵守衛。 (「魏志倭人伝」)**

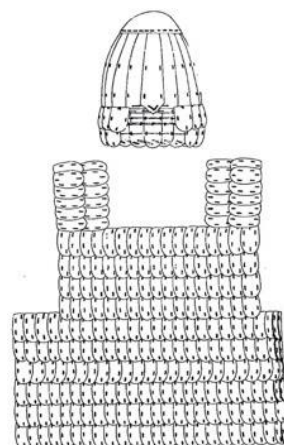
「倭人伝」には、“邪馬壹国の兵は矢竹に鉄または骨の鏃をつけた長弓を使っていた”ことが記されています。当時の戦闘には鉄鏃が有効な武器だったと思われます。邪馬壹国と狗奴国の戦場となった熊本の菊池川、白川流域、そして阿蘇盆地などから大量の鉄鏃が出土しています(注①)。

防御用装備については、遺跡から出土する木製の短甲、埴輪に残る皮革製の鎧などがあります。ただこれら旧式の甲冑は「倭人伝」には記されていません。中国大陸では古くから鉄製の甲冑が使われていたので、これらは魏の使者にとって、武具とはいええないものだったかも知れません。

韓半島では高句麗が楽浪・帯方郡を313・314年に攻略し南下を始めます。高句麗軍はすでに三世紀から鉄製の甲冑を装備していました。

四世紀の装飾古墳の壁画には図②のような甲冑を纏った重装騎兵が歩兵と共に進んでいる図が描かれています。

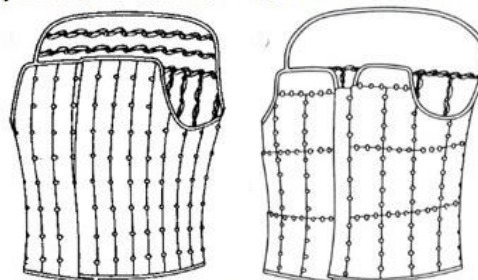
高句麗の強力な軍団に対抗するため半島南部の国々でも鉄製武器の採用が進められていきました。半島に展開していた倭人も弥生時代の木製短甲のデザインを基本として、材料を鉄に替えた図③の甲冑を開発して行きます。古墳時代の前期甲冑と呼ばれるものです。



図② 高句麗の甲冑

この前期甲冑には二種類の形式のものが出土しています。下図③-1)が堅矧板革綴短甲と呼ばれているもので、鉄板を縦に細く切り、それを革ひもで綴じたものです。全国で3例が見つかっています。③-2)が方形板革綴短甲で、鉄板を方形に切りそれを革ひもでつなぎ合わせたものです。全国で20例弱が出土しています。それぞれ出土数が少なく、また製作技法がまちまちなので、これらの短甲は高句麗などの技術を取り入れて、伽耶の工人が手作りしたもの、もしくは彼らの指導で倭人が作ったものと考えられています。伽耶は鉄を産出し、金工技術も進んでいました。そしてそれを身にまとった軍事集団が日本各地に進出し、死後古墳に埋納されたと思われます。方形板革綴短甲は日本列島の古墳だけでなく、韓半島南部伽耶の大成洞古墳・福泉洞古墳（四世紀中頃）からも出土しています（後述）。

1) 堅矧板革綴短甲 2) 方形板革綴短甲

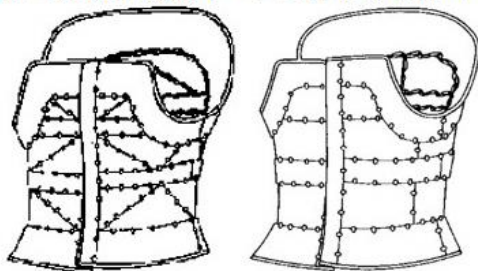


図③ 古墳時代前期の甲冑

II. 倭国における甲冑の技術革新と量産化

『新羅本紀』には345年に新羅と倭が国交断絶し、翌年倭兵の新羅への攻撃が記されています。それまでの倭・新羅の友好関係が破綻し韓半島での戦いが始まりました。倭人は装備拡充のため、鉄製甲冑の規格化と量産化を進めます。四世紀後半になると、鉄板を三角形や帯状に同じ形に切断し、それぞれの鉄板を革で綴じた短甲が作られました。もっとも古い三角板革綴短甲（図④）は福岡市南区に作られた老司古墳から出土しています。長方板革綴短甲も糸島の鋤崎古墳から出土します。これらの古墳はヤマトの大王墓より100年早く、韓半島で使われていた

1) 三角板革綴短甲 2) 長方板革綴短甲



図④ 古墳時代中期初頭の甲冑

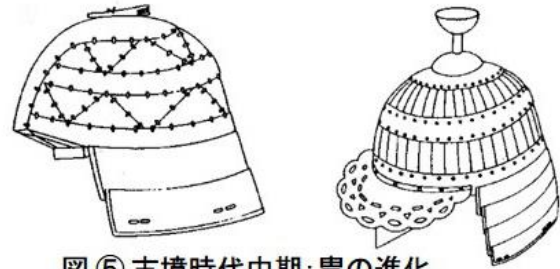
横穴式石室を採用していました。邪馬壹国の時代から韓半島の先進技術に触れ、半島と深くつながっていた地域でした。そしてこれら短甲の量産が進められ、五世紀には北九州だけでなく韓半島や、日本全国から大量に出土するようになります。鉄板の継合わせも最初のころは革で綴じていましたが、五世紀に入るとすぐに半島で使われていた鋳留技術が採用され、防御機能がより強化されます。

また、冑も最初は実践的な前面に衝角の付いた三角板革綴衝角付冑が作られていましたが、これも大陸から最新の技術を取り入れ、軍団長クラスは小札を鋳で留めた、金銅製の眉庇付冑を身にまとうようになります（図 ⑤ 1)三角板革綴衝角付冑 2)小札鋳留眉庇付冑 ⑤）。

攻撃用の鏃もそれまでの小型のものから、貫通力の高い、細くて長い長頸式鉄鏃に変わっていききました。

従来の武具に対して飛躍的に強力な装備を身に着けた軍団が各地に進出していきます。

この甲冑がどの地域で出土しているのか、まずは朝鮮半島から出土する倭系甲冑から見ていきたいと思えます。



図⑤ 古墳時代中期:冑の進化

Ⅲ。韓半島における倭系甲冑の分布

百濟新羅舊是屬民由來朝貢、而倭以辛卯(391)年來、渡[海]破百濟口口新羅以為臣民……(好太王碑文,414年)

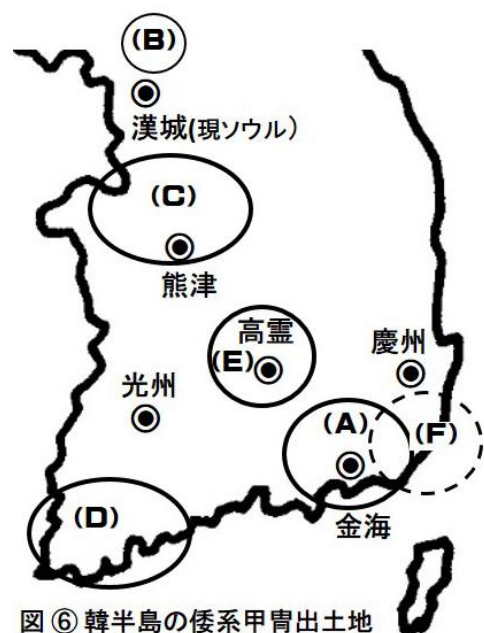
好太王碑文には、百濟・新羅が391年に倭軍の来寇により離反したので、好太王自ら395年にこれを撃退し百濟・新羅を配下に置いたと（注②）が記されています。さらに碑文には399、400、414年と倭との争いのことが述べられています。倭兵は簡単に撤退せずに高句麗軍との間で激しい戦闘を続けていたものと思われます。

三世紀には貧弱な木製の甲冑を身に着けていた倭国軍は、四世紀後半になると高句麗の強力な軍団に対抗できるまでに装備を整え、韓半島南部に軍を展開していたのです。

韓半島では約30の遺跡から倭系甲冑が出土しています。地域別の出土状況を見ていきましょう（図⑥⑦）。

1) 四世紀の半島東南部・慶尚南道（図⑥A）

最初の倭系甲冑は、四世紀中頃に半島の東南部に築かれた大成洞古墳・福泉洞古墳から出土しています。図③-2の方形板革綴短甲です。洛東江西岸の



図⑥ 韓半島の倭系甲冑出土地

大成洞古墳地域は金官伽耶国の中心で弥生時代には甕棺など、北九州系の遺物が大量に出土し倭人との関係が非常に深かった土地です。「倭人伝」にも倭の北岸「狗邪韓国」と記されている所です。

この地域の古墳からは、その後も五・六世紀を通じて量産化された三角板革綴短甲を始めとして、各種の進化した倭系甲冑が出土しています。古くから一貫して倭人の半島における活動拠点があったと考えられます。

2) 四世紀末～五世紀初頭の百済領域・京畿道 (図⑥B)

好太王碑の399～414年記事「倭国軍は簡単に兵を引かなかった」ことを裏付ける遺物“倭国兵の甲冑”が出土しています。この時期百済の首都は漢城（現ソウル）にあり、高句麗と百済はイムジン河をはさみ対立していました。ソウルの北西、イムジン河を望む要衝には「六溪土城」が築かれていました。その土城の南側の坡州市丹月里に当時の遺跡が見つかっています。その遺跡から倭系短甲として初めて量産化された「三角板革綴短甲」が出土しています。四世紀末のものと見られています。

好太王の碑文とそこに出土する遺物から、貧弱な武装しかしていなかった倭国軍は急速に最新鋭の武装をととのへ、百済王の要請に応じてか、それとも倭の領地拡大を目論んだのか、はるか北、現在の南北朝鮮の国境まで兵を進めていたことがわかってきました。武の上表文には「渡平海北九十五国」とあります。倭国への主力は北九州から派遣されてきた人達だったのでしょうか。

3) 五世紀中頃～後半、忠清道 (図⑥C)

この時期には半島中西部の忠清道の遺跡から倭系甲冑が出土しています。475年に百済は高句麗の圧力に耐えきれず、都を漢城から熊津に移して国土防衛戦を継続します。この時に倭国は再び軍を北方に派遣したものと思われます。倭王「武」の父兄の時代と思われます。武の上表文には「句麗無道にして、図りて見呑を欲し、辺隸を掠抄し、虔劉して己まず。(略)奄に父兄を喪い(略)甲を練り兵を治め、父兄の志を申べんと欲す」と、高句麗との熾烈な戦いの有様が記されています。

4) 五世紀前半～中頃・後半、全羅道・西南部海岸 (図⑥D)

韓半島の西南海岸部の遺跡からは、五世紀を通じて倭系甲冑が出土しています。対岸は中国の江南地域です。「晋書」「宋書」には413年以降の倭の朝貢記事が記されています。倭の五王はこの韓半島南西部にも拠点を確保し、ここから中国南朝へ使者を派遣していたと思われます。五世紀後半にはこの地に前方後円墳が築かれます。武の上表文には“高句麗のため父兄を失い、喪のため兵を休めた。そして喪があけたので

| | 4C中頃 | 4C後 ～5C初 | 5C前 ～中 | 5C中頃～6C |
|-----------|------|-------------|-----------|---------|
| A・F) 慶尚南道 | ■ | ■ | ■ | ■ |
| B) 京畿道 | | ■ | | |
| C) 全羅南道 | | | ■ | ■ |
| D) 忠清道 | | | ■ | |
| E) 慶尚北道 | | | ■ | ■ |

方形板 ■■■■■ 革綴短甲 ■■■■■ 鋳留短甲 ■■■■■ 桂甲 ■■■■■

図⑦ 倭系甲冑の地域別変遷

再び高句麗を攻撃する”と記されています。倭王武はこの地域で兵を休め、高句麗再征の準備をしていたのでしょう。韓半島における前方後円墳の出土状況から、倭国軍主力はこの地域を拠点とし、北方に軍を展開していたことが窺われます。

5) 五世紀末～六世紀初頭 慶尚北道・高霊地区 (図⑥E)

六世紀に入ると『三国史記』には倭と新羅の戦闘記事がなくなります。韓半島南部では新羅が伽耶諸国の併合を次々と進めていきます。この時倭兵は伽耶軍に参加していたでしょう。伽耶の中心、慶尚北道の南端にある高霊地区の古墳から倭系甲冑が出土しています。伽耶は562年に新羅との最後の抵抗戦に敗れ歴史から姿を消しました。

6) 慶尚南道、新羅領域における倭系甲冑 (図⑥F)

従来、金官伽耶国の領地であり、倭人の影響が強かった慶尚南道は五世紀以降新羅の強い影響下に入りましたが、五世紀後半、六世紀においても倭系甲冑が出土しています。

そしてその他のこの地域から出土する遺物から、宗像・豊前の豪族が沖ノ島を經由して新羅へ向かう東海岸北上ルートの拠点としてここに基地を築いた可能性も考えられています。大阪豊中市の御獅子塚古墳や瀬戸内の古墳からこの地域で使われていた「鍔」が出土しています。また、四・五世紀の瀬戸内・摂津・大和の古墳から伽耶との結びつきを示す筒形銅器が出土しています (注③)。百済と博多湾岸を結ぶルートとは別に伽耶・新羅と九州北東部・瀬戸内とを結ぶルートが存在していた可能性も考えられます。

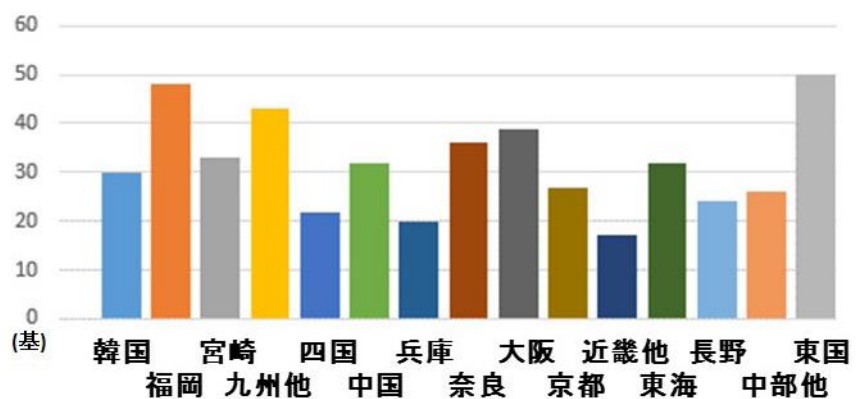
IV. 北部九州から出土する中期甲冑の変遷

日本列島において、四世紀末から五世紀にかけて使われていた中期甲冑の出土する古墳は500弱あります。その多くが九州と近畿地方に集中しています (図⑧)。

その中でまず、最も出土する古墳が多く、また最初に倭系短甲の量産化が行われたと考えられる北部九州の状況を見ていきたいと思います (図⑨⑩)。

日本列島に初めて出現した方形板革綴短甲は、

博多湾西岸の今宿遺跡群にある4世紀前半に作られた若八幡古墳から出土しました。そして福岡県周防灘側の苅田町にある石塚山古墳 (四世紀後半) などからも出土しています (図⑨⑩A B)。いずれも前方後円墳です。初期甲冑は全国から20以上が出土していますが、規格がまちまちです。日本最初の鉄製甲冑の製作は、弥生時代後期から鉄生産が盛んだった今宿遺跡の工人が半島の技術を導入して行った可能性が考えられています。



図⑧ 中期甲冑の出土する古墳数

日本列島で始めて規格化された三角板革綴短甲が出土したのは、福岡市南区に四世紀後半に作られた老司古墳です。この前方後円墳には畿内の大王墓に100年先駆けて百済から取り入れた横穴式石室が採用されています。また若八幡古墳の近くに作られた鋤崎古墳からも三角板革綴短甲が出土しています。鋤崎古墳は

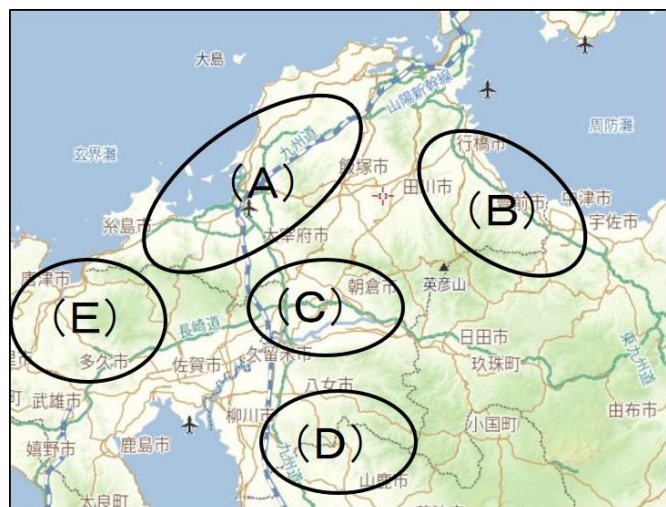
| 古墳の編年→ | | 四世紀 | | 五世紀 | | | | 六世紀 | |
|--------|-------------------------------|-----|---|-----|---|---|---|-----|----|
| | | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| A | 福岡平野 宗像・津屋崎 小郡・甘木 筑豊 | | | | | | | | |
| | 豊前北部 大分平野 宇佐 大分南部 | | | | | | | | |
| C | 浮羽・吉井 久留米・鳥栖 八女 | | | | | | | | |
| | 肥後・菊池 肥後中部 肥後南部 | | | | | | | | |
| E | 佐賀平野 松浦 佐賀西部 | | | | | | | | |

前期短甲 革綴短甲 鋌留短甲 桂甲

老司古墳よりさらに進んだ本格的な横穴式石室が採用されています。いずれも韓半島勢力との結びつきが強いと考えられる古墳です。

その後、量産化された三角板・長方板革綴短甲、そして新しく鋌留技術を取り入れて防御機能を強化した鋌留短甲がつぎつぎと倭国軍に採用され、各地の古墳から出土ようになります。北部九州では、四世紀中頃に博多湾岸と福岡市の豊前側沿岸部の古墳から出土した鉄製の甲冑は、次に筑後川流域さらに南側の古墳からも出土し、そして南の熊本の古墳、西は佐賀の古墳からも出土するようになります(図⑨⑩ A→E)。

甲冑の時代別出土状況から見ると、倭国軍主力は最初、博多湾岸と瀬戸内方面の豊前に配備されていたことがわかります。次に筑後方面から肥後へ、その後、西の佐賀方面に進出していったことが見えてきます。



北部九州の甲冑の変遷(2)

博多湾岸には四～六世紀を通して最新鋭武具を装備した軍団が駐留していました。このことから、倭の五王の拠点は邪馬壹国以来の博多湾岸から太宰府に位置し、そこから各地に方面軍を派遣し、支配領域を拡大していったことが読み取れます。

そして五世紀の半ばからは、南の熊本を越え、さらに宮崎方面へも進出していきます。えびの高原では5世紀後半に作られたより防御機能の高い鋌留甲冑が大量に出土しています。精鋭部隊が各地に派遣されていたのです。

倭の五王の都の筑後遷都説が提唱されています(注④)。しかし五世紀においては、韓半島南部の倭国軍はまだ健在で高句麗軍に対峙していました。新羅に対しても『三国史

記』によれば、倭国軍が攻勢の立場に立っていました。倭の五王が、高句麗・新羅をおそれ、倭国の中枢部を博多湾岸から筑後川以南に移すことはまず考えられません。

V。神籠石山城群

太宰府を大きく取り囲むように神籠石山城群が作られています。図⑩が神籠石山城の分布図です。北部九州の山の中には一辺が70cm位の切石（岩を割って作った石）を並べて其上に柵を立て山の中腹をぐるりと取り囲んだ山城が築かれています。

玄界灘から上陸する敵の奇襲攻撃に対しては宗像・津屋崎地区に精鋭部隊が配置されていました。この部隊には五世紀後半に入ると、その後の日本の甲冑の標準となる最新鋭の「桂甲」が配備されています（図⑨）。そしてその背後に雷山と鹿毛馬に神籠石山城が築かれていたのです。瀬戸内側からの攻撃に対しては御所ヶ谷と唐原に、また有明海側に対してはおつぼ山と女山にも神籠石山城が築



図⑩ 倭国中枢部を囲む神籠石山城群

されました。さらに倭国中枢部の最終防衛線として帯隅山、高良山、杷木、阿志岐にそれぞれ神籠石山城が築かれています。

この山城の造営年代について通説では早くても七世紀以降の建設とされていますが、詳しい調査はされておらず、考古学的にも年代を決定づける明確な出土品は見つかっていません。

太宰府の前面には「水城」も築かれていました。水城の築造年代は一般的に七世紀とされていますが、九州歴史資料館が水城の土台に敷かれた「敷粗朶」の炭素14年代測定をした結果、下の層の粗朶の値は三世紀と五世紀を示しています（図⑪）。

Tab.21 放射性炭素年代測定結果（1）

| 出土位置・層位 | 番号 | 樹種 | 年代 | $\delta^{13}\text{C}$ | 補正年代 | Code No. |
|---------------------|----|-------|------------|-----------------------|------------|----------|
| ATr.GL-2.0m粗朶層 | 5 | ツブラジイ | 1420±110BP | -27.2 | 1380±110BP | IAA-203 |
| ATr.坪掘1 中層第2層 (暗灰粘) | 3 | ヒサカキ | 1700±100BP | -31.1 | 1600±100BP | IAA-204 |
| ATr.坪掘2 第3層 | 1 | ヒサカキ | 1850±100BP | -27.8 | 1800±100BP | IAA-205 |

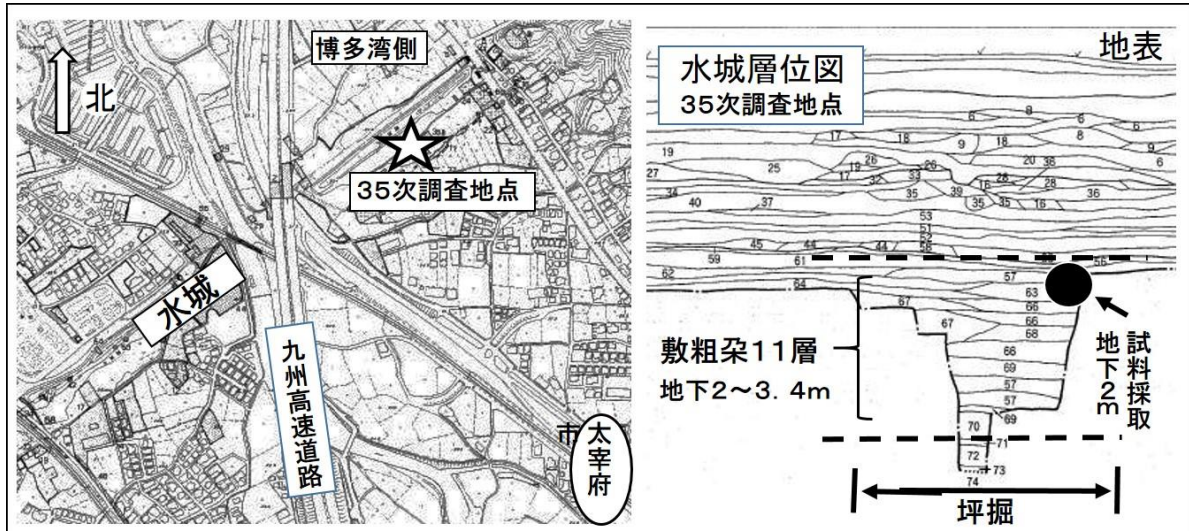
1)年代測定は、β線計測法による。

2)年代測定は、1950年を基点とした年数で、補正年代は $\delta^{13}\text{C}$ の値を基に同位体効果による年代誤差の補正を行った値。

3)放射性炭素の半減期は、5570年を使用した。（出典：『水城跡』下巻、九州歴史資料館、2009年327頁）

第⑪図 水城35次調査炭素14測定結果z

2001～2年にかけて行われた水城第35次調査では、2mほどの深さまでの調査が行われ、その地点で敷粗朶を検出したので、その下をさらに掘り下げたところ（坪掘）、11層の敷粗朶が3.4mのところまで敷き詰められていることが確認されました（図⑬）。



第⑬図 水城35次調査炭素14測定結果

そして地下2mのところの敷粗朶を調べたところ“ツブラジイ”という椎の枝が使われていることがわかり、その炭素年代を測定したところAD600～770年という結果が出たものです。さらに坪掘りによりその下の敷粗朶を調べたところ、仏壇に供える榊に似た“ヒサカキ”という樹木の枝が使われていて、その年代は三世紀と五世紀前後を示していました（図⑫）。

水城の南側の筑紫野・太宰府を中心とする地域は邪馬壹国の時代から倭国の中心地域でした（注⑤）。太宰府周辺には卑弥呼の時代からすでに何等かの防御が施され、さらに倭の五王の時代には、それが神籠石山城によりさらに強化されていたのかも知れません。

また、四世紀には朝倉・筑紫野で韓半島の最先端技術を取り入れた須恵器の生産が始まっています（図⑭）。倭の五王時代にこの地域は軍事だけでなく、産業の中心としての様相を呈していたと思われる。

これらのことから、“漢委奴国→邪馬壹国→倭五王→日出処の天子”の国々は一貫して博多湾岸から太宰府・筑紫野周辺を中枢領域として活動していたものと考えます。

| | 四世紀 | | 五世紀 | | | | | 六世紀 | |
|-----|-------|------|-------|------|-------|------|------|------|------|
| 形式→ | TG231 | TK73 | TK216 | ON46 | TK208 | TK23 | TK47 | MT15 | TK10 |
| 朝倉 | ■ | | | ■ | ■ | | | | |
| 筑紫野 | ■ | | | | | | | | |
| 早良 | | | | | | | | | |
| 今宿 | | | | ■ | | ■ | ■ | ■ | |
| 早良 | | | | | | | ■ | | |
| 宗像 | | | | | | | ■ | ■ | ■ |
| 水城 | | | | | | | ■ | | ■ |
| 牛頭 | | | | | | | | | ■ |
| 八女 | | | | | | | | | ■ |
| 豊前 | ■ | | | | | | | | |

第⑭図 北部九州の初期須恵器生産地

倭五王の筑後遷都説の根拠とされている、曲水の宴跡や筑後国府跡は七世紀の遺構です。古墳時代中期の産業の中核である須恵器も筑後で作られるのは六世紀からになります。考古出土物から、五世紀における筑後遷宮説は成立しないと考えます。

なお、倭の五王の宮都はどこにあったのか、今のところ何処にもそれらしき遺構は出土していません。この件に関して古田先生は「どうやら、わたしたちは筑紫のいたる所に九州王朝の遺跡を眼前にしながらかたくなにこれに目をつぶってきたのではあるまいか」と述べられています（注⑥）。福岡市在住の中村通敏氏は90冊以上ある那珂川市の埋蔵文化財調査報告書をチェックし、安徳大塚古墳を卑弥呼の墳墓の候補として見つけれられました（注⑦）。我々もこのような地道な作業が必要ではないかと考えています。

VI. 倭王の軍団の各地への進出

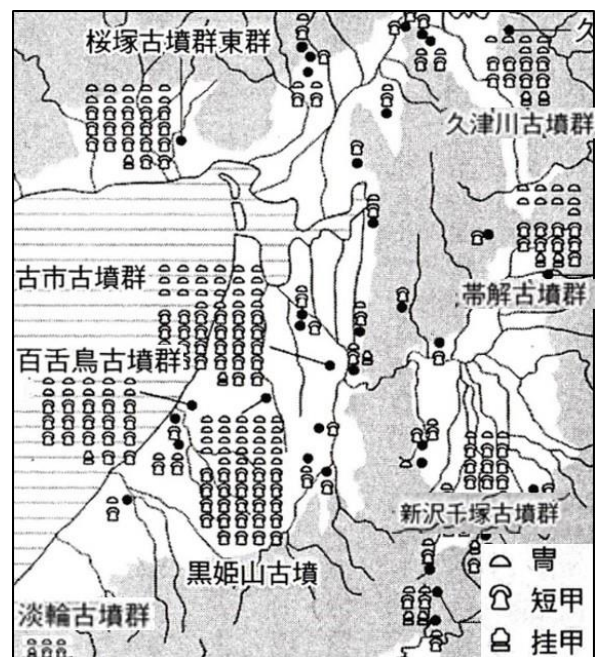
倭王たちは五世紀の後半に宮崎の西都原古墳群を拠点としてえびの高原や大隅半島に兵を進めます。えびの高原の島内古墳の地下式墓からは五世紀後半の鋳留短甲が大量に出土し、大隅半島の東海岸沿岸部には前方後円墳が作られています。

また近畿地方では四世紀前半に奈良盆地の中に作られていた大型前方後円墳よりさらに大きな古墳が、四世紀の中頃から河内平野に作られるようになります。この時の出来事は「神功皇后紀」に九州からの侵攻説話として描かれています。最新鋭の甲冑を纏った九州の勢力（神功皇后の軍団）が奈良を本拠とする忍熊王・麿坂王の兄弟を破り、河内平野を拠点に超大型古墳をつつたのです。

河内平野では大型古墳だけでなく、大量の武具・甲冑が出土しています。特に河内の古市・百舌鳥の古墳群と黒姫山古墳、そして北摂・豊中市の桜塚古墳群から出土する三角板革綴短甲をはじめとする中期甲冑の数量は群を抜いています。

甲冑の出土状況から本拠地である河内平野には常備軍がおかれ、豊中の桜塚古墳群周辺には摂津・播磨さらには丹波方面への抑えのため軍団が駐留し、また奈良盆地北部の帯解古墳群、そして南の新沢千塚古墳群周辺の兵は旧勢力の残存勢力を抑えるため駐屯していたようです。そして山城地区から東国への進出のため、淀川・木津川の合流点近く、京都府南部の久津川流域に軍を配置したと思われます（図⑮）。

五世紀、畿内において北から“豊中・蛍池”、“上町台地・法円坂”、“紀ノ川河口・鳴滝遺跡”の三カ所に大型倉庫群が設置されています。蛍池倉庫には北摂・丹波一円から、



第⑮図 畿内中期甲冑の分布図

法円坂倉庫には淀川・大和川から、鳴滝倉庫には紀ノ川流域から物資が集められ、その物資はここから瀬戸内海を通り博多湾へ、さらに朝鮮半島の戦線に送り込まれたかもしれません。桜塚、淡輪古墳に埋められた甲冑の主はこの兵站の守備も担当していたと思われます。

九州南部、近畿地方を傘下に収めた倭王たちは、日本海沿岸、東海、信州、東国へも進出していきました。各地から出土する甲冑の分布から、それぞれの地域に軍団が派遣されていた様子が見えてきます。

大和盆地の旧勢力を倒し、河内に政権を築いた倭王の派遣軍は、各地から集められた混成軍だったのでしょうか、すぐに内部抗争を始めます。「書紀」には後継争いのため、次々に身内を葬っていく説話が記されています。そして最後の武烈と称される指導者の代になると、北陸から攻めてきた継体軍により簡単に滅んでしまいます。その後、畿内では蘇我氏など新興勢力が台頭してきます。

九州における倭国の本体も何等かの変動があったと思われます。倭の五王の後継者は天子を名乗り、九州年号を制定し、中国からの完全独立を目指します。六世紀には新しい時代が始まったのです。甲冑も五世紀を代表する「短甲」の時代は終り、六世紀には全身を防御する「桂甲」に変わっていきました。

Ⅶ. 大型前方後円墳

畿内の古墳の特徴は大型の前方後円墳が作られたことです。日本列島において大型前方後円墳は、南は日向から瀬戸内の吉備、そして畿内では奈良盆地と河内平野に作られています。この時代博多湾岸から朝鮮半島にかけて倭国軍の主力が展開していた地域には大きな古墳は作られていません。倭国中枢部に大型前方後円墳が作られなかったことに対し、古田先生は

イ) 南朝は思想的には、魏の初代天子、文帝ののべた薄葬思想を受け継いでいた。

ロ) 南朝系列下の倭国の墓は、当然、南朝の帝王陵以下の規模でなければならぬ。

ハ) 同じ南朝系列下の百済の武寧王の古墳も径20m、高さ7.5mと小さい。

とされ、“小型古墳こそ南朝との結びつきを示している”とされています(注⑧)。事実中国の文化圏にある朝鮮半島においてもこの時代の古墳はすべて小規模です。

一方、日本列島において、中国文化と直接に接していない東九州や瀬戸内、近畿地方は弥生時代の大型化への伝統(銅鐸・鏡など)がこの時代にまで残っていたのでしょうか、古墳も日向、吉備、畿内と超大型と呼ばれる規模のものが作られています。

「書紀」には河内の古墳を築いた天皇の妃として髪長媛、草香幡媛皇女が登場します。また吉備からも吉備稚媛が皇妃となっています。いずれも大型古墳が築かれていた地域です。神功の遠征軍には日向・吉備の豪族が参加し、河内における王朝の中枢を担ったのでしょうか。彼らは、自分たちを権威づけるため、彼らが滅ぼした奈良盆地の大型古墳よりさらに大きな超大型前方後円墳を作った可能性があります。

なぜ大型古墳は九州王朝になく、近畿に集中しているのかの問い（注⑨）は、このように、すでに古田先生が答えを出されています。

おわりに

花粉による正確な年代測定

本稿は古田先生が今後の指針として示された“考古史料の分布”（注⑩）の視点から、韓国/柳本、北九州/宇野、畿内/田中（図の出典参照）三氏の調査報告などをもとに、倭の五王の活動領域をまとめたものです。全体をまとめる過程で一番問題になったのは、韓半島・九州・近畿から出土する考古遺物の年代の判定です。

現在の考古学会において、それぞれの地域における編年は出土する土師器・須恵器の変遷から、出土する順番はある程度整理されています。ただその実年代を判定する場合、畿内においては日本書紀の記述に頼り、九州の土器編年は、基本的に畿内の編年を基準として使われています。

ところが、日本書紀の年代が正しいかどうか、また九州と畿内に出土する類似した土器が同じ時に作られたものか、誰も証明できていません。

世界の考古学会ではすでに実年代判定の基準は“炭素14年代測定法”に基づいています。そして炭素年代を実年代に換算する「較正年代曲線」＝“年代のものさし”は主に、若狭湾三方五湖の水月湖の年縞に残されていた炭素14の残留量に基づいて決められています（注⑪）。日本のデータが世界の「年代のものさし」に使われているのです。ところが、日本の考古学会は炭素14を測定するための“土器に付着するスス”などの試料は長年地中に埋められたもので汚染されており、正確な測定が出来ないなどの理由で、この科学的測定方法を一部しか採用していません。

この件に関し近年、水月湖で年縞の研究を進めている立命館大学の研究グループが、地層に含まれている花粉の炭素14の年代測定に成功し、“日本古代史を書替える”ことにつながる炭素年代測定のサービスを始めました。すべての地層には良好な測定試料となる「花粉」が含まれています。「水城」を例にとれば水城を構成する地層の各層に含まれている花粉の年代をピンポイントで正確に測定できるのです（注⑫）。

神籠石山城群も多くの学者は何の科学的根拠もなく、日本書紀の記述をもとに白村江以降に作られたものとしていますが、この年代もピンポイントでの測定が可能になります。

水城や神籠石山城群、またすべての遺跡の年代をいつまでも、あいまいにしておくのではなく、早急にそれぞれの地層に含まれている「花粉」の炭素14を測定し、年代問題の決着をつけることは、日本の古代史研究の急務です。一日も早く、日本においても理科学的根拠に基づいた正しい古代史像を描かねばなりません。

<注記>

注① 大下隆司「古代の南九州(上)」多元会報165号、2021年9月

注② 古田武彦『失われた九州王朝』ミネルヴァ書房 2010年。第三章

- 注③ 田中晋作「武器・武具から復元する古墳時代の常備軍」『倭王の軍団』第2章、新泉社、2010年
- 注④ 古賀達也「九州王朝の筑後遷宮」『新・古代学』第4集、新泉社、1999年
- 注⑤ 大下隆司「比恵那珂遺跡は“不弥国”か」東京古田会ニュース199号、2021年
- 注⑥ 古田武彦「九州王朝の古跡」『邪馬壹国の論理』朝日新聞社、1975年
- 注⑦ 中村通敏「邪馬壹国探索の旅 その46」（「棟上寅七の古代史批評」2021.7.29）
- 注⑧ 古田武彦『ここに古代王朝ありき』ミネルヴァ書房版268頁、2010年
- 注⑨ 古賀達也「九州王朝説に刺さった三本の矢」古田史学会報135～7号、2016年
- 注⑩ 大下隆司「古田武彦氏の学問の方法について」（八王子）古代史セミナー2018
- 注⑪ 中川毅『時を刻む湖』岩波科学ライブラリー、岩波書店、2015年
- 注⑫ 「花粉が“50,000年のモノサシ”に！年代測定に革命を起こした技術とは？」立命館大学古気候学研究センター、2021年2月

<図の出典>

- 図① 上表文の図解：大下隆司、山浦純「第3章 倭の五王」『「日出処の天子」は誰か』ミネルヴァ書房2018年
- 図② 高句麗の甲冑：高橋工「東アジアにおける甲冑の系統と日本」日本考古学第2号1995年
- 図③～⑤甲冑の変遷：『武器・武具から見た5世紀の日本と朝鮮』豊中市教育委員会、1991年
- 図⑥,⑦：韓半島の倭系甲冑：柳本照男「五・六世紀の日韓関係」豊中歴史同好会つどい334号、2015年11月。「4・5世紀の東アジアと倭政権」堺市博物館講演資料集、2021年4月をもとに作成
- 図⑧ 全国甲冑の出土数：宇野慎敏「武器・武具からみた軍事組織について」豊中歴史同好会講演資料、2021年3月より作成
- 図⑨⑩ 北部九州の甲冑：宇野慎敏『九州古墳時代の研究』学生社、2003年より作成
- 図⑪ 神籠石山城群：古田武彦『奪われた国歌「君が代」』情報センター出版局、2008年174頁。この書において、神籠石造営時期は六世紀との古田先生の見解
- 図⑫⑬ 水城の炭素14測定：『水城』上・下巻、九州歴史博物館、2009年
- 図⑭ 北部九州の須恵器生産：植野浩三「五世紀後半代から六世紀前半代における須恵器生産の拡大」奈良大学文化財学報16、81－102、1998年より作成
- 図⑮ 畿内中期甲冑の分布図：田中晋作「武器・武具から復元する古墳時代の常備軍」『倭王の軍団』第2章、新泉社、2010年